

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 番場 俊

本論文は、ドストエフスキーの小説を読み解きながら、そこに現れた近代小説というジャンルの特性を「手紙」「告白」「メディア」といった観点から分析し、19世紀ロシアの作家が創作を通じて小説という形式をいかに探求したかを論じたものである。ドストエフスキーについては既に世界で膨大な先行研究があり、この分野で新たな貢献をすることは難しいが、番場氏は緻密なテキスト分析能力とヨーロッパの芸術・文学の歴史に関する幅広い知見を活用する一方で、社会背景に関する実証的な調査も踏まえ、小説という制度そのものに対する根源的な問いかけをした作家の姿を鮮やかに描きだすことに成功した。

本論文は四部から構成されている。

第I部は小説の中に現れる手紙に着目して、デビュー作である書簡体小説『貧しき人々』から後期の長編『悪霊』に至る過程を追い、手紙の果たす役割が劇的に変化するとともに、小説の読者が共同体から引き離されて孤独な受容者になっていったことを鮮やかに示している。

第II部は告白というモチーフを軸に、ドストエフスキーの小説を法と宗教が交差する場として捉え直した。ここでは理論的な探究と並行して、1860年代ロシアにおける司法制度の改革に関する周到な調査の成果が示され、従来「予審判事」として理解されてきたポルフィーリーが実際には司法改革の過程の中で一時的に生じた過渡的な存在の「捜査担当官」であることが突き止められた。また「スタヴローギンの告白」と呼ばれることの多い『悪霊』の章は、政治的檄文や犯罪者による供述調書などの異なったジャンルの文体的特徴を備えており、むしろ告白という形式そのものを問い直すテキストであり、「告白」と呼ぶのは適切ではないとの結論が導かれた。

第III部はドストエフスキーと同時代の新聞雑誌などのメディアとの関わりに焦点を合わせ、犯罪者の声を伝えるメディアの形式に着目し、肉声、速記、裁判記録などがドストエフスキーの創作方法とどう関わっていたかを分析している。

第IV部は『カラマーゾフの兄弟』を読解するとともに、19世紀小説と並んで発展してきた統計学や精神分析といった学問分野が、近代において失われた人間の全体性を回復するための希求において、小説と競合する関係にあることを論証している。

以上のように、本論文は実証的調査と理論的分析の両面に支えられながら、斬新な観点からドストエフスキーが切り拓いた近代小説というジャンルの可能性を論じて上述のような新発見と新解釈をもたらし、先行研究が解明しないままできた創作のいくつかの重要な側面を明らかにした。著者の創見の中には、まだ仮説の段階に留まり、さらに調査と論証が必要と思われるものもあるが、本論文は全体として、ドストエフスキー研究の新たな地平を切り拓く独創的な著作として高く評価できる。それゆえ、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しいとの結論に至った。